

第129回簿記検定試験 3級 出題の意図・講評

[第1問]

(出題の意図)

本問は、いずれも基礎的な内容の取引を仕訳させる問題です。注意点等はそのとおりです。

1. 小切手受取後ただちに当座預金に預け入れる際、当座借越（負債）残高がある場合には当座借越の精算を行った上で当座預金への入金処理を行います。
2. 単価を表す際に用いる@マークに注意します。また、購入時の登録手数料（付随費用）は、車両運搬具の取得原価に算入します。
3. 当店発行の商品券は、商品券勘定（負債）で処理されており、売上時の代金として受け取った場合は、商品券勘定残高を減少させます。
4. 旅費の概算額は仮払金勘定で処理されており、その精算により旅費の金額は確定するため、計上済みの仮払金を消去し、現金との差額により旅費交通費を計上します。
5. 個人企業の場合、店舗にかかる税金は租税公課（費用）で処理し、店主個人にかかる所得税などの税金は、引出金（または資本金）で処理します。本問では、勘定科目が指定されているため、引出金を使用します。

(講評)

本問の出来は概ね良好でしたが、2.の取引については文章の読取りや登録手数料の処理から生じる間違いなど、誤答の割合が他の取引と比べると多かったようです。解答にあたっては、問題文を正しく読み、思い込みにより誤った解答をしない様に注意をしてください。

[第2問]

(出題の意図)

受取利息勘定と未収利息勘定の記入に関する問題を出題しました。利払日において当社は利息を受け取るが、決算日までの期間に属する利息については、見越し計上を行います。この場合、決算において未収利息を計上します。また、決算において計上された未収利息は、翌期首において再振替仕訳を行い、受取利息勘定に振り替えなければなりません。

本問において、決算における見越し計上の仕訳と、翌期首における再振替仕訳について、正確な理解がないと正答できません。資産・負債の勘定と収益・費用の勘定の性格の違いを理解し、決算整理手続、損益振替手続および繰越記入の手続きのメカニズムを理解していることが重要です。これらの手続きについて正確に理解していないと、さらに発展的な内容を理解することが難しくなるので、基礎をしっかりと固めていただきたいです。

(講評)

今回の3級問題の中では、本問の出来はあまり良くなかったようです。出来ている受験者と出来ていない受験者がはっきり分かれていました。

基本をしっかり理解していれば、解答の形式が異なるだけです。問題をぱっと見てあきらめずに、柔軟に対応できるように学習をしてください。

[第3問]

(出題の意図)

通常の合計残高試算表を作成する問題を出題しました。基本的な解答へのアプローチは、個々の取引について仕訳を行い、各勘定科目ごとにその結果を集計するという手順です。したがって、個々の取引について正確に仕訳を行うことと、勘定科目ごとの集計を網羅的かつ正確に行うことが必要となります。

解答に際しては、データを整理する労を惜しむことなく、秩序正しく処理することが重要です。断片的に解けそうなところから解答用紙を埋める方法は、最もリスクが高い解き方です。実務においては、間違いが許されない作業ですので、限られた時間の中ではありますが、あわてないことが重要です。

売掛金と買掛金については、実務的には、取引先の数も取引数も多数に及ぶと考えられますので、取引先別に記録を行うことが重要です。売掛金勘定と買掛金勘定に記入する際は、取引先ごとの人名勘定にも記入するイメージをもって解答しましょう。

(講評)

本問は、基本的な簿記の仕組みを問う問題で、比較的良くできていました。取引内容そのものは単純でボリュームもそれほど多くない問題でしたので、満点の答案もあった一方、売掛金明細、買掛金明細の金額ミスも散見されました。

基本的な問題なので、油断せずに確実に得点していくことが大切です。

[第4問]

(出題の意図)

本問は、仕入取引に関する起票の問題です。このタイプの問題は、これまで幾度も出題されているので、3伝票制と5伝票制における起票の練習を積んでいれば、比較的容易に解答を導くことができるはずです。

この種の問題は、まず5伝票制で起票された伝票から取引を推定して仕訳し、その上で仕訳をどのように分解または推定して伝票に記入すればよいかを判断します。(1)については、仕入取引を現金取引と掛取引に分解して仕訳し、その仕訳に沿って起票していきます。また、(2)については、掛けで全額仕入れたものとして取引をみなして仕訳し、その結果を仕入伝票に起票するとともに、買掛金の代金の一部について現金で即座に支払ったと考えて仕訳をして、その結果を出金伝票に起票します。

(講評)

これまで何度か出題されたタイプの設問であったため、全体としての正答率

はまずまずだったようです。ただ、答案を見ていくと、(1)と(2)のいずれも正解となっている答案と、いずれも不正解となっている答案に極端に分かれていました。そのため、不正解となった受験者の多くが、設問の5伝票制にもとづいて起票された伝票から、取引を適切に推定できなかったのではないかと考えられます。

この類の問題を解くためには、単に起票の方法を理解しておくだけでなく、伝票から取引を導き出す練習も十分に積んでおく必要があります。

【第5問】

(出題の意図)

本問は決算整理事項の処理に先立って未処理の事項を処理してから、決算整理事項の処理をするという点で、処理事項が多くなっているものの、基本的には、精算表の作成に関する基本問題です。未処理の事項及び決算整理事項の内容はすべて3級の学習範囲の中で取り扱われているものであり、それらの処理について格別難しい点はないと考えられます。それらの処理事項についての仕訳が正確に行われていれば、解答はおのずと導かれるものと考えられます。

決算日に判明した未処理の事項は、現金過不足、仮払金、誤記入訂正など、すべてが期中取引として取り扱われる3級の内容であり、それらの事項についての理解がきちんとされているかを問う問題です。決算整理事項として列挙されている事項もすべて3級の精算表問題での典型的な事項であるので、それらの処理について格別戸惑うことはないと考えられます。

(講評)

本問は決算整理事項の処理に先立って未処理の事項を処理してから、決算整理事項の処理をするという点で、基本的には、精算表の作成に関する基本問題です。

全体的に見て、成績は満点に近いグループと、0点に近いグループに二極分化している状況です。これは、精算表の問題は3級の全体的理解を有機的に問う問題であり、内容をきちんと理解できている人とそうでない人に分かれているためであると考えられます。

解答に際して間違いが多かった箇所は、期中に購入した有価証券を含めた期末の評価額の金額、未処理の事項と決算整理事項を考慮しなければならない受取手数料の金額、前払保険料の金額、現金過不足の原因不明分の勘定科目といった点でした。これらの処理が正確に行われていれば、全体的には格別難しい問題ではないと考えられます。